RIPPLE SAILING CLUB
NO.115

月刊 1992.4.15

RIPPLE

（発行） 500円
リプル・セイリングクラブ
〒238−03
神奈川県横須賀市長井2−11−1
TEL 0468−57−1711

今年度 第1回目のリプル・カップ

去る4月12日今年度最初のリプルカップが行われた。
参加者5名というこじんまりとはしているものの、おのの選手はこの冬こまめに来ては艇の改良をし、あるいは凍てつくような寒さの中で練習を重ね、少しでも速く走ろうとする者ばかりで、今回のレースは日頃の腕試しと言った感のレースになった。

高気圧に覆われたここ長浜沖は晴天なれど北の風3−4m／sと程良い風では有るが、風が確実に振れ回る気圧配置なのだ。しして海面はあくまでも澄み渡り、またチョッピーな波さえない海面に第一レースのフォグフォーンは鳴ったのである。

国体経験の長谷川を追う展開となるが藤村、小池も練習の成果がはっきりと出てきているのである。
小池に至っては第2レース長谷川を押え第一下マーク迄は堂々のトップを引いていたが、ジャイブのわずかなミスのためずるずると3位にとずり落ちてしまったのである。

、ヨットレースとはスタート時には階段の最上段にいて、ミスの度に一段ずつ降りて行くものと聴いた事があるが正にそんな第二レースであった。
少しずつではあつたが風が南の風へと180度も振れだし毎回コースの打ち直しをしながらの第3レース、小池艇が微風の王者の貫禄で堂々のトップフィニッシュと長谷川の完全優勝を押え、確実に練習の成果が出たレースとなった。
そして最終第4レース、風も南に落ち着き5m／sと安定してきた中往年の藤村が微風の王者を押さえて何とかめんつを保ったのである。
それにしてもガーゼの様などんぶかドラフトのセールで河合、島田も良く走りました。成績はいま一だっったけれど、今後のレースには大いに役にたった事と思います。
参加者の皆さんご苦労様でした。5月のリプルカップは5月10日（日）になりますのでお待しております。

レース結果

	1	2	3	4	T.P
長谷川	1	1	2	1	4.25
〃	2	3	1	3	8.75
藤村	3	2	3	2	10
河合	5	4	4	4	17
島田	4	5	5	5	19

RIPPLE号上架は4/11〜4/14（助っと来む）

ようやく京急マリーナより上架許可が下り、来る5月11日より14日迄恒例の船底整備に入ります。
前日の10日に回航をしたいのですがリプルカップが有るため11日の回航となります。
夜明け前には出航しようと思います。
裕次郎カップ、初日の出クルージング、そして整備の為にとその度通る三浦半島半周クルージング、今回はちょっと趣向を凝らしてフィッシングを兼ねたクルージングにしたいと思います。
回航日は時正に真鯛の産卵シーズン。いわゆる乗っ込みのど真中、初心者でもキロ級以上の真鯛が入れ食いとの事、こんなGoodな時期を見逃す手は有りません。ほんの2−3時間道草を食って行きましょう。
場所は産卵場所としてつとに有名な観音沖0．8マイル沖の大根30m立ち。名々クーラーボックス満杯の真鯛を入れての回航、参加者は代休なり有給をお早めに取って下さい。

でも、でもこれは10日に回航が行われなかった場合の話で、回航第一優先ですので、私は長浜沖でリプルカップのコミッティーをしておりますが、回航セーリングをしたい人は、マリーナに置いている人達の上下架に邪魔にならない10日の5時頃京急マリーナの桟橋に着くようスケジュールを立てて下さい。（船底の藻が乾いちゃうと後が大変なので桟橋に着けたままにして置いて下さい。）
そして、乗っ込みの真鯛は帰りの回航の時にでも致しましょう。

PS・・・この間クラブハウスを空けますのでご不便をおかけしますが何か有りましたら留守テレか、下記にお電話を。
0468−82−2720 （京急マリーナ）

連休のクルージングの予約はお早めに

ぽつぽつと連休のクルーザーの予約が入りつつあります。
この時期は高気圧に覆われぽかぽか陽気になる頃ですが、気圧配置には現れない、いきなりの突風が吹くことでも知られている頃です。
ですから、泊り込みのクルージングは避け日帰りのクルージングをお勧めします。それも、早めの出航で早めの帰港をお勧めします。
先日11名によるクルージングをマックスで28ノットの中のセーリングをしましたが、参加者は久しぶりのセーリングだったのかリーフの要領を忘れている人が殆どだったです。
一度岸壁を離れると全てを自分でしなくてはならないRIPPLE号、楽しいだけのセーリングばかりでは有りません。もう一度マニュアルの熟読をお勧めします。

夢をありがとう!!

”日本”は、ファイナルラウンドに勝ち進めず銀のカップの奪取は第29回大会まで持ち越されることに成ってしまいましたね。
夢を与えてくれたクルーの皆さん、また映像等には決して出てこない皆さん、本当にご苦労様でしたと心から労いの言葉をかけて上げたいですね。
思えば1987年NCACは組織され、同年9月にはクルーの選考会が行われたのであるから、実に4年7カ月もの間彼らは一つの目標に向かって突き進んで来たのである。バブルが膨張しきった時もまたはじけた時も黙々と目標を一点に置き完全燃焼をしたのである。

私が仕事の関係で蒲郡を訪れたのは'88年6月で、当時ベースキャンプの開設を祝って、街なみにはあのニッポンチャレンジのロゴマークの小旗は街のそこかしこに掲げて有ったものの、街の人はそれが何処で何をしているのかも判らない状況であったのです。
でもそこで見たものは、零細企業の製造工場と倉庫みたいな所をうろついてはいるものの、やけにでかい体で潮焼けした真っ黒な顔に目だけがぎょろぎょろとした、今でこそマスコミに取り上げられカラーで紹介されている4．7年前の彼らだったのです。

実績だけが重要視される今日ではあるが、カップは持ち帰ることが出来なかったものの、会社を辞めまた学業半ばにして一つの事にあれだけ打ち込めた彼らの満足度は計り知れないものが有るに違いないと思う。忙しさに追われだらだらと過ごした自分と比べ、心の中に大きな生涯に残る勲章を引っ提げ彼らは日本の地を踏むのであろう。

ファイナルに進めぬ事が決定した後、南波氏が涙を浮かべながら”これが始まりですよ。”と言っていた言葉通り次回の大会に向け既にNCACは出場を表明しました。
彼らの次の熱い戦いは、オークランドになるのかベニスになるのか、セートになるのか、はたまたサンディエゴになるのかクライマックスは5月9日からです。
そして、次の次のA・Cの時にはもし勝ったら蒲郡とか三崎とか浜名湖とかがはっきり言えるような造船大国でもあり、ハイテク大国でもありそれにも増して海洋大国になっていてくれたらと思います。